

第一章 原始時代

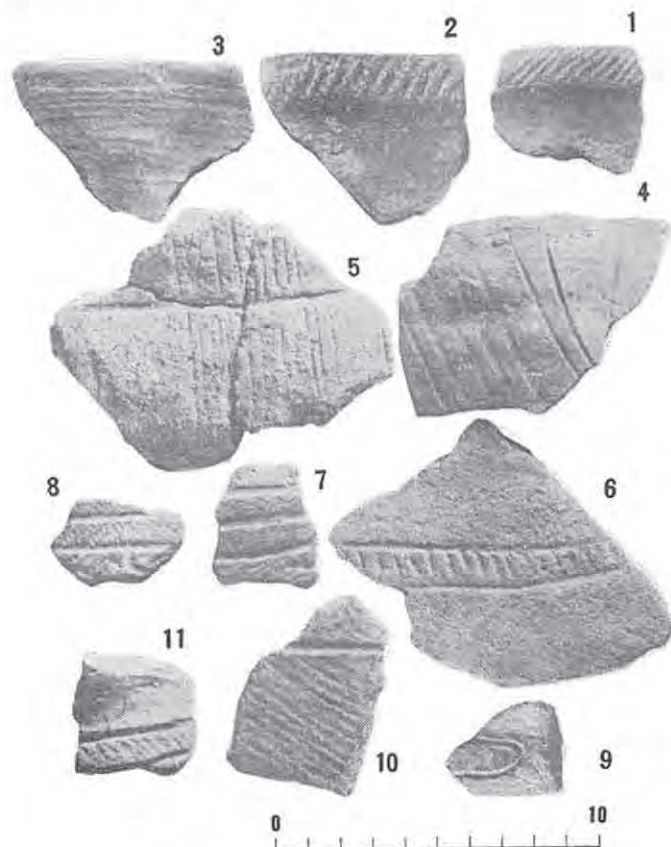
第一節 縄文時代の遺跡と遺物

五條の文化は数千年前の先史時代にさかのぼる——。さきに地理編に述べられたように、この時代の文化は、吉野川流域（川岸）に発達・分布していたものとみられる。同川は大台ヶ原山に発源、奈良県のほぼ中央を西流、北部の奈良盆地を中心とした低地と南部の吉野山地とに分し、当市の小平野を経て和歌山へ流出している。同川流域先史時代の遺跡はいずれも川岸台地や段丘上に位置することが多く、上流から ①塚穴、②稲口、③切畑、④原、⑤滝、⑥上島野、⑦下島野、⑧六倉、⑨小島、⑩遍照寺、⑪引ノ山、⑫野原、⑬靈安寺、⑭良峯、⑮中之、⑯中、⑰火打などの遺跡が段丘上に並んでいるが、⑱引ノ山だけが山頂に位置している。

先史時代の遺跡が吉野川流域に集中して存在していることは、おそらく、飲料水や食料としての魚貝類を川に求めていたことと、稲作に欠くことのできない水を得るために低湿地の近くを選んだのであろう。また交通路としての川の利用も考えられていたとみるべきである。

当市の縄文時代の遺跡については、最近の急速な開発にともなう考古学的調査によってようやく明らかになっては来たが、なお将来に多くの発見を期待しながら、現在までに確認された九か所の遺跡と、その遺物について述べることにしたい。

東阿田塚穴遺跡 吉野川の右岸当市と大淀町の境界にある丘上の西方斜面が遺跡とみられる。⁽¹⁾付近には石鏃や石くずなどが散布している。この遺跡の西方約六〇〇米をへだてた稲口、切畑にも縄文遺跡がある。



東阿田稲口遺跡出土の縄文土器 (単位 cm)

太い線で区わけした土器(5)、縄文をほどこし一部をすりけした、すり消し縄文と呼ばれるものや、羽状縄文など各種の文様がみられる。

これらの土器片からみて、形は口の開いた深鉢や浅鉢が多いように思われる。土器は比較的良好質の粘土で作られており焼きも良く褐色をしているものが多い(6~17)。

土器のほかに讃岐石の石鏃(矢じり)や砂岩、片麻岩の石錘(網のおもり)などが出土している。二上山で採れた讃岐岩は薄く打ち欠くことができるため、石器の材料として多く使われている。石槌は棒状の自然石の両端を打ち欠いてひもをかけるよう

りの砂の層になっている。この層から出土する遺物は、すべて縄文土器と石器で、小形の土器一点をのぞいてすべて破片である。そのため形は明らかではないが土器の文様には各種のものがみられる。ひっかききずのような細いすじをたくさんつけたもの(条痕)、細い竹のようなものでつけたもの(沈線)、へらでつけたもの(刻線)、縄文を一面につけ一部分をかこって中の縄文を消したもの(磨消)、ほそい竹でついた円形のもの(円形)など、縄文時代の後期に使われた土器と石鏃(石の矢じり)、石錘(石のおもり)が主なものである。

土器の文様を見ると口の部分をわずかにもり上げてこれに縄文をつけたもの(二七五頁、1・2)、土器の表面にたたき目を残すもの、太い線で土器面をわけ、下部にはけ目を残すもの(3)、口縁部に近い所に縄文をつけたもの(4)、



東阿田塚穴遺跡の遠景



東阿田稲口遺跡の近景

東阿田稲口遺跡 阿田峯台地から南へ
のびる尾根の南斜面のその部分に遺跡
が広がっている。

昭和二十七年旧大阿太小学校の西側に
五條中学校大阿太分校を建設、運動場の
拡張と整備が行なわれた際、校舎の南斜
面で遺物を含んだ包含層が発見され、学
術調査が行なわれた。

遺跡は地表から約四〇㎝の所にあり遺
物と少しの小石を含んだ約一〇㎝程度の
黒色包含層が幅三米ほどの帯状をなし、
吉野川にのびており、その下は小石まじ



切畑遺跡の遠景



上島野遺跡の景観

石鏃、石さじなどの石器類や石屑などである。石器はすべて打製石器で讃岐石が多く使われている。⁽³⁾ 石鏃は数の少ない利器で、手鎗や投鎗として使ったのであろう。石さじは皮はぎともいわれ動物の皮をはいたり、肉や魚などを切るのに使った調理道具である。この遺跡は稲口遺跡と関係がある可能性もあるので、今後の調査が期待される。

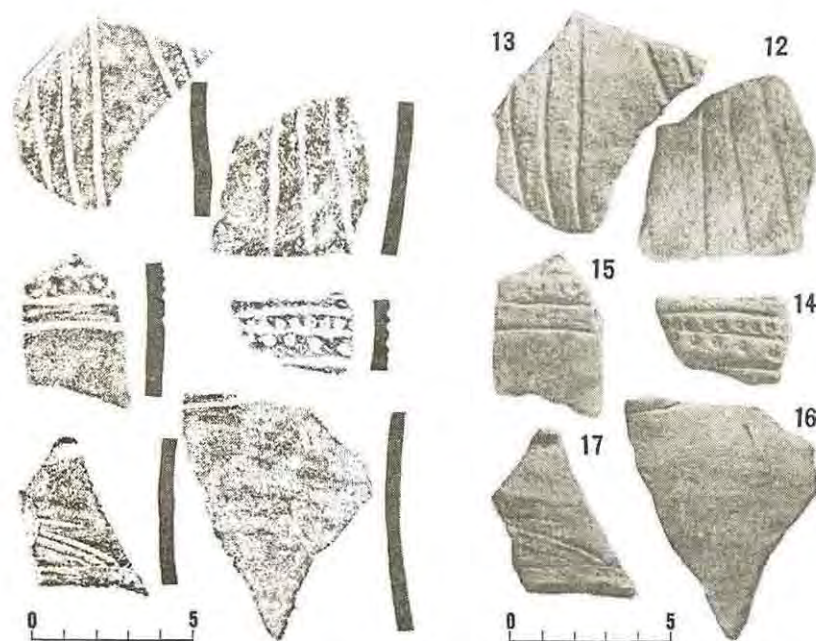
原遺跡 阿田小学校の北約一〇〇米の位置にあり縄文と弥生の遺跡である。この遺跡は、弥生遺跡の調査中に縄文土器が発見されたもので、土器は小片で表面に縄文が施されており、胎土の中には結晶片岩の粒がふくまれている。色は明褐色である。⁽⁴⁾

上島野遺跡 昭和二十六年頃土器や、

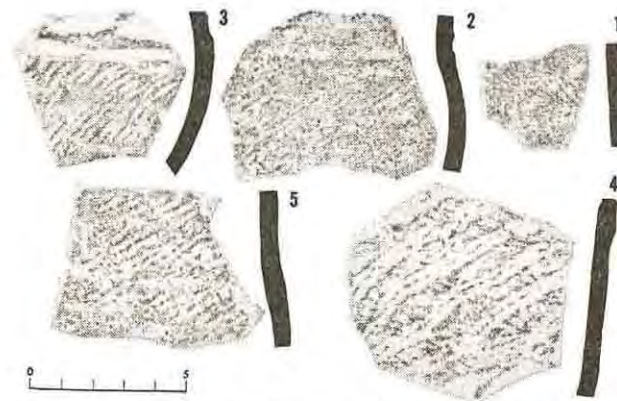
につくられており、網のおもりに使用したのであろう。普通は楕円形の平な長手の小石を使っていることが多い。この遺跡は、遺物が示すように、上流の宮流遺跡や下流の上島野遺跡と文化的つながりをもつ代表的な縄文後期の遺跡である。

切畑遺跡 稲口遺跡の西北にある台地上の遺跡である。

ここから出土した物は爪形文という割竹の先を押しならべてつけた文様をもつ古い縄文土器の破片や、石鏃、石鏃、石さじなどの石器類や石屑などである。石器はすべて打製石器で讃岐石が多く使われている。⁽³⁾

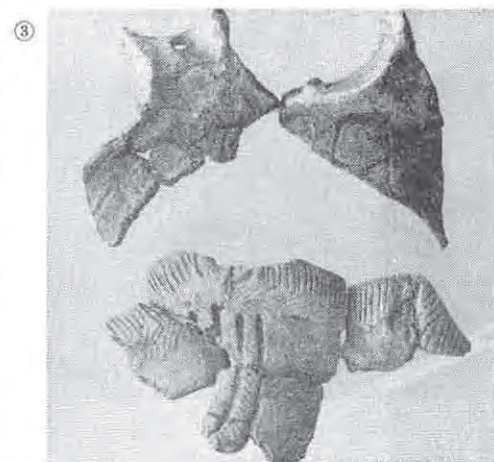


東阿田稲口遺跡出土縄文土器 (左・拓影) (単位 cm)

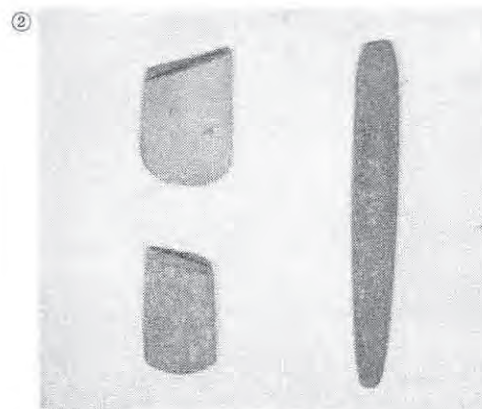
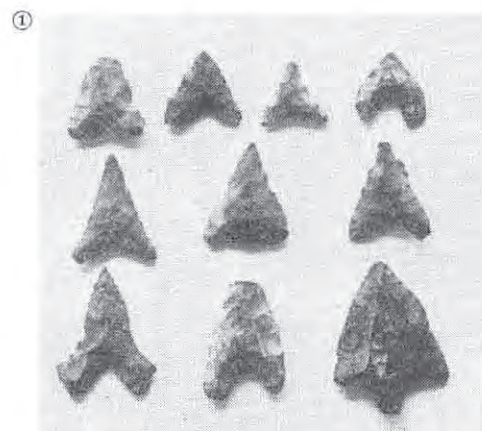


東阿田地区出土の縄文土器 (拓影) (単位 cm)

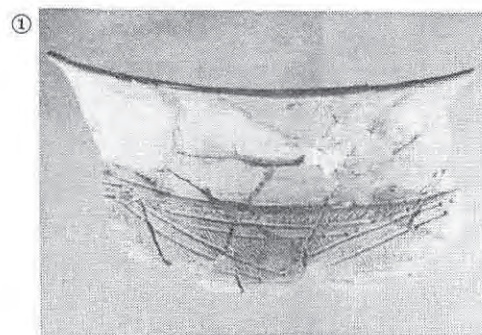
これらは重要な食料資源であったにちがいない。またこれをえさにしていた動物が群をなしていたと思われる（鹿・猪・熊・きつね・たぬき・うさぎ・鳥など）。これらの動物や植物以上に大切なものは川や沼に無数に生息する魚貝類である。けものや魚貝類は食用以外に生活用具の材料としても大切な役割をはたしていたらしい。例えば毛皮は衣類に、角・骨・貝殻などは釣針、縫針、装身具などに使用したのである。次に他の地域との関係を考えて見ると、上島野上流地域や市内の各地（稲口・切畑・原中）はもちろん、下流の紀ノ川沿岸の地域とも交りがあったと考えられる。下流の各遺跡（市脇・直川・福宜・吉礼・鳴神・溝之口・西野・安井など）から出土した土器の中にも上島野出土のものと同じ型式の土器が多数含まれている。土器の中には、吉野川（紀ノ川）流域だけでなく、大阪（縄手・馬場川）、奈良（天理・竹ノ内・



上島野遺跡出土の縄文土器



上島野遺跡出土の石器（石鏃・石斧・石棒）



上島野遺跡出土の深鉢型縄文土器

石器を採集したのが発見のきっかけである。当時、地表に土器片や石器、石くずなどが多く散布していた。それから二〇数年後に遺跡の範囲を確認するため、地主の佐野留吉氏と堂阪貢氏のご好意で畑地の遺物採集をさせてもらったり、遺物の出土状態などを教えていただいた結果、市内では、最も重要な遺跡であることがわかった。佐野・堂阪両氏の話から推察して、竪穴式住居がある可能性はあるが、学術調査がなされていないので断定はできない。

遺跡は、吉野川の南岸にある段丘上に開けた半月状の台地で、まわりを山や林に囲まれた生活環境としては最良の土地である。縄文時代には川や沼に魚貝類が豊かに生息し遺跡をとりまく野山には、シイ、イチ、クリ、カシ、トチ、クルミなどの木の実や、野いちご・野ぶどう・ぐみ・くず・ゆり・いも類など食用になる植物が茂っていたはずである。

榎原) など近畿各地の土器と似たものも多く出土している。また中には、兵庫北部(但馬地方)や北陸方面から搬入されたと考えられる形式の土器も検出されている。

〔石器〕 石鏃、石鎗、石錐、石匙など各種の石器類でいずれも打製石器である。材料はサヌカイトが使われている。おもりは緑泥片岩と砂岩で、川原石の一端を加工して使ったものである。石斧と石棒は、磨製で材料は緑泥片岩と砂岩を磨いて加工したもので、大きい二点の石斧はハマグリ刃で端正な作で、石棒は緑泥片岩製で小形である(①②)。

〔土器〕 器の種類は、浅鉢、皿、注口土器、深鉢、つぼなどで、これらの多くは、口縁部にきざみ目や、波状・山形・曲線などの変化や装飾がほどこされており、胴部にも様々な文様がつけられている。磨消縄文・渦巻文・曲線文・



下島野遺跡の遠景(南側から)



霊安寺遺跡の遠景(北側から)



良峯遺跡の遠景(北側から)

羽状文・縄文・隆起線文・平行線文・刺突文・引掻文など多種多様でバラエティに豊んでいる(①④)。器壁も薄手から、厚手まで様々で色も茶色、薄茶色、黒色など色とりどりである。

下島野遺跡 上島野遺跡の下流二・三〇〇米の川岸にそって、できた平らな台地が遺跡である。土器片や石鏃、石くずなどが散布しているが遺跡があるかどうかは不明である。

霊安寺遺跡 野原小学校の南側に広がる畑地が遺跡である。表面採集によって爪型文と磨消縄文の小さい土器片を採集している。石器はサヌカイトの石鏃・石さじ・砂岩の石硯等多数採集されている。今後の調査がまたれる遺跡である。

良峯遺跡 霊安寺遺跡の東南五、六〇〇米のところにある遺跡で、サヌカイトの石くずや土器片の散布が見られるが、未調査のため詳細は不明である。

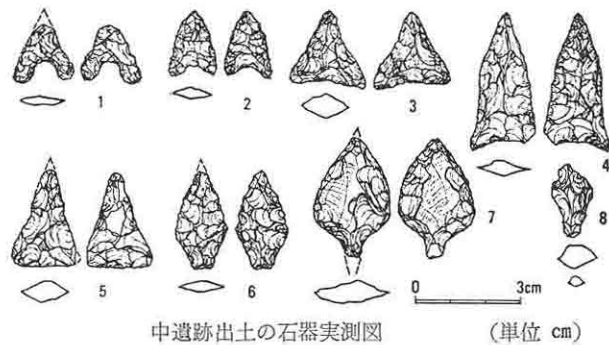
中遺跡 中遺跡は野原遺跡の南西約三軒の位置にあり、吉野川にそった南側の段丘の上にある。昭和三十一年に阪合部小学校建設のための地盤調査の時に発見され、網干善教氏によって報告されている。遺跡の範囲は小学校敷地の東から南にかけて広がっていると思われる。遺物は現地表下二〇〇㎝くらいで、土師器と弥生土器が出土する層があり、一米から一・二米の間くらいから縄文土器を含む層になっている。土器の出土は少なく数片にすぎない。

粗い縄文をつけたもの、条線の刻み目をつけて口の内側を磨いた土器、二条か又は多くの平行線をつけたものなどで、稲口や島野で出土した土器と似ており、時期も後期のものである。

南仙山遺跡 昭和五十三年夏、中之町寺尾地区の雑木林の中で縄文土器の小片を採集した。土器は中期のもので上流の北六田出土の土器とよくにている。文様は細竹様の器具でつけた刺突文を口の部分などに並べてつけている。また、一部に爪形文をつけたものもみられる。遺跡の性格については、わずかな土器片の表面採集だけのため、くわしいことは不明であるが、海拔一七五米くらいのところにある貴重な縄文遺跡である。

霊安寺遺跡表探の石器計測表 ②

	器種	分類	全長 (現存長) cm	幅 (現存幅) cm	厚さ (現存厚) cm	石材
1	石 鏃	凹基無茎式	(1.65)	(1.67)	0.49	サヌカイト
2	石 鏃	凹基無茎式	(1.52)	1.59	0.31	サヌカイト
3	石 鏃	凹基無茎式	1.64	1.40	0.36	サヌカイト
4	石 鏃	凹基無茎式	(2.1)	(1.7)	0.39	サヌカイト
5	石 鏃	凹基無茎式	(2.20)	(1.45)	0.31	サヌカイト
6	石 鏃	凹基無茎式	2.02	1.28	0.66	サヌカイト
7	石 鏃	凹基無茎式	(1.43)	(1.01)	0.28	サヌカイト
8	石 鏃	凹基無茎式	1.79	(1.64)	0.28	サヌカイト
9	石 鏃	平基無茎式	(1.40)	1.95	0.35	サヌカイト
10	石 鏃	平基無茎式?	1.81	(1.45)	0.37	サヌカイト
11	石 鏃	平基無茎式	2.04	1.24	0.3	サヌカイト
12	石 鏃	——	(1.6)	1.11	0.26	サヌカイト
13	石 槍	——	(2.75)	(2.30)	1.0	サヌカイト

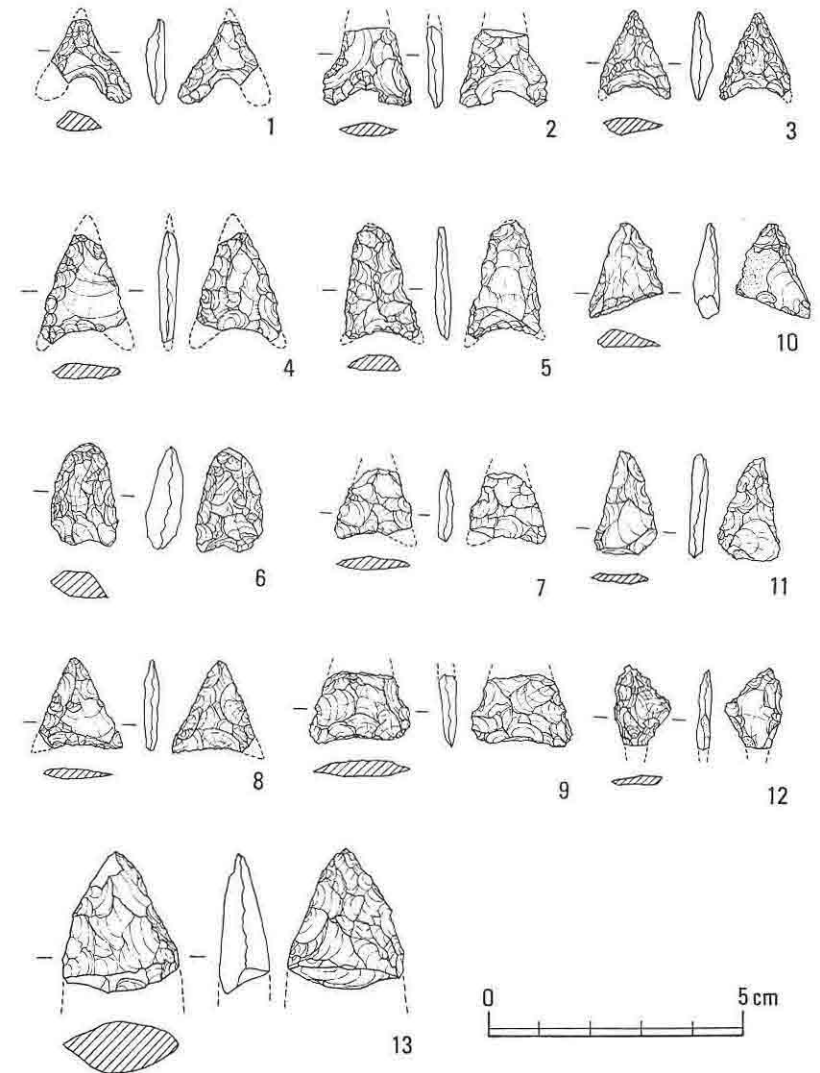


中遺跡出土の石器実測図

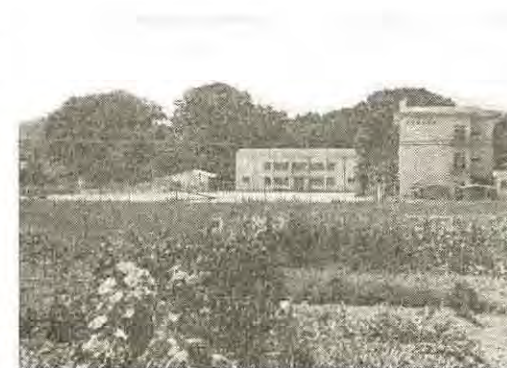
(単位 cm)

当市の原・滝・六倉・野原・遍照寺・中・火打(銅鐸出土地)など弥生時代の遺跡は、吉野川の低湿地、又は水の便のよい土地に位置している。原と中の両遺跡をのぞいて学術調査がされていないために遺跡の性質や内容については不明であるが、土器や石器はかなりの量が発見されている。土器は縄文土器よりも器面は平滑で器形も機能的になっている。文様も縄文土器にくらべ少ないが、それでも平行線文・波状文・格子目文・同心円文など様々な文様がつけられ、全体に明るい赤色をしている。土器は縄文土器のようなかざりもなく、全体的に見て均整がとれ

第二節 弥生時代の遺跡と遺物



霊安寺遺跡表探の石器実測図 ①



中遺跡の遠景（東側から）



火打遺跡

ている。これらの土器も中期末から後期になると作りも粗末になり、文様も少なく大量生産になってきたことがわかる。

原遺跡 阿陀比売神社西方、半月状に、南北一杆、東西〇・三杆、阿太小学校を中間としてかなりの範囲に広がっているようである。

昭和十年頃、下村武治氏が小学校付近の深さ約一米程度から土器を発見し、末永雅雄博士が確認された重要な遺跡である。

以来、遺跡は破壊されることもなく、同五十三年五條市農業協同組合阿太支所と株

式会社カシミヤが遺跡と思われる所に建物の建設を計画したため、事前に発掘調査を実施した。⁽⁷⁾

調査は工事日程の関係で全面発掘が出来ず両方とも試掘の段階で終らざるをえなかった。調査はまず地形に合わせて南北三〇米、東西二八米、幅四米のL字形に試掘を行なった。遺跡は上から耕土二五糎、黄灰色土二〇糎、黒褐色土五糎の順で堆積していて一米で地山になっている。この地山の部分に弥生時代中期の遺物が多く発掘された。この部分にL字状の溝や、直径一八五糎、深さ八四糎の大きい穴などが見つかった。L字状の溝は、全体を掘ることができなかったため、どんな形であるかは不明である。溝の幅は、一二〇糎で深さは六五糎あり、断面はU字形である。この中からかめの底や鉢などが出土した。そのほかに完全な形のつぼが口を西に向けて横にころがした状態で出土した。また、



原遺跡の遠景（東側から）

みぞのまがった所で石鏃が出ていた。みぞの北寄りの所では砥石が発見された。このみぞの曲っている南の部分に、直径一八〇糎、深さ八四糎の大きな穴があり、中から土器石器炭化物のほかに高坏の脚がたおれた形のままで出土した。

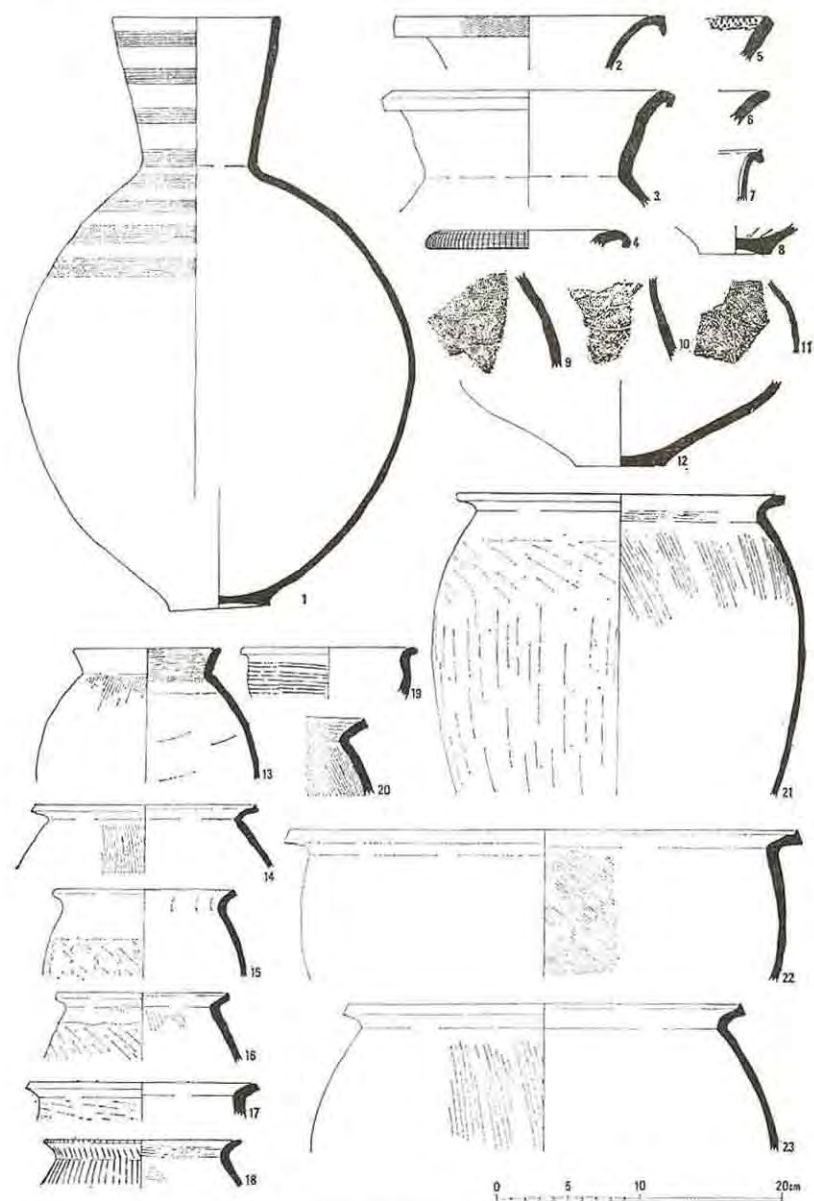
〔土器〕（図1・2・3）

つぼ（1）は町寧に磨いた口縁部（外反）の広い土器が多数出土している（1〜32）。（2）は卵形の胴で上にいくにしたがって広がっていく、細くびつばで、上げ底である口の部分から胴のかたの部分にかけ、一三本の線を一つの集まりとした櫛がきの直線の文様が八つ引かれている。色は黄褐色で大きさは高さ四一・七糎、口径一一・七糎で完全に近いつぼである。（2〜4）は口の部分が外にそり返りはしはまっすぐに切っている。

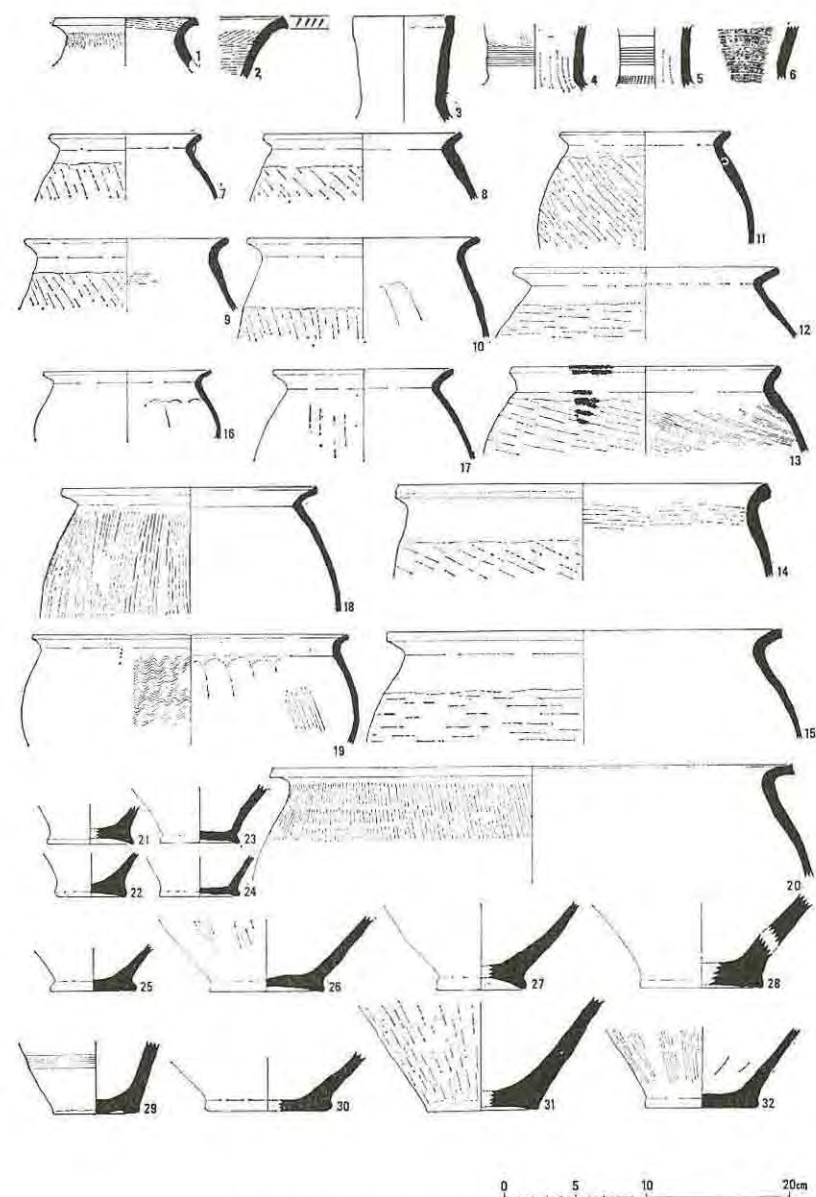
（3）は口の部分に幾つもの波状の文様をめぐらしている。（4）は口の所に簾状文がかかっている。（12）はつぼの底の部分である。（13）は短い首のかめ特徴である。（21）は胴長で口の部分は外にそり返っている。口の部分は二三糎あり、かなり大きいかめである。（34）は鉢である。外はたてにハケ目をつけた後、二本のヘラ描きの波状の文様がかかっている。（35）上半分に三条の櫛がきの簾状文と二条の直線文がかかれ口の下に二個ずつの穴があげられている。（39〜44）は脚の筒部である。

〔石器〕

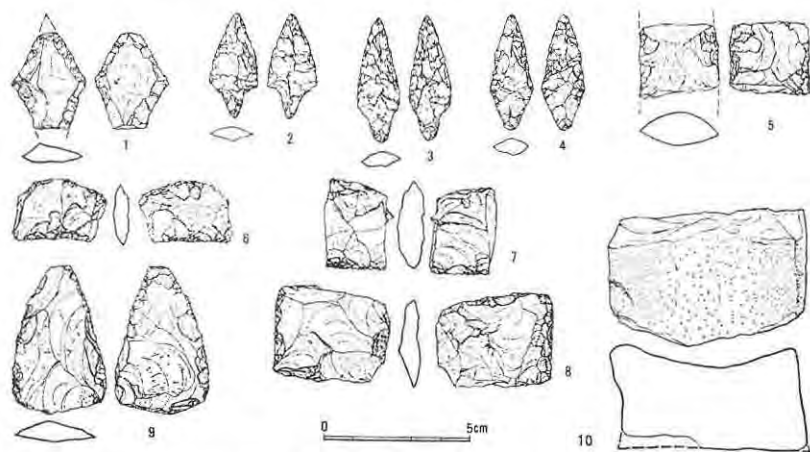
発掘面積が狭いため出土した石器の数量も多くない。出土した石器は打製石器と砥石・石くずなどで何れも讃岐石である。遺物は石鏃四点（1〜4）、槍先形石器一点（5）、楔形石器三点（6〜8）、削器三点（9）である。他に砂岩の砥



原遺跡出土の弥生土器実測図 (2)



原遺跡出土の弥生土器実測図 (1)



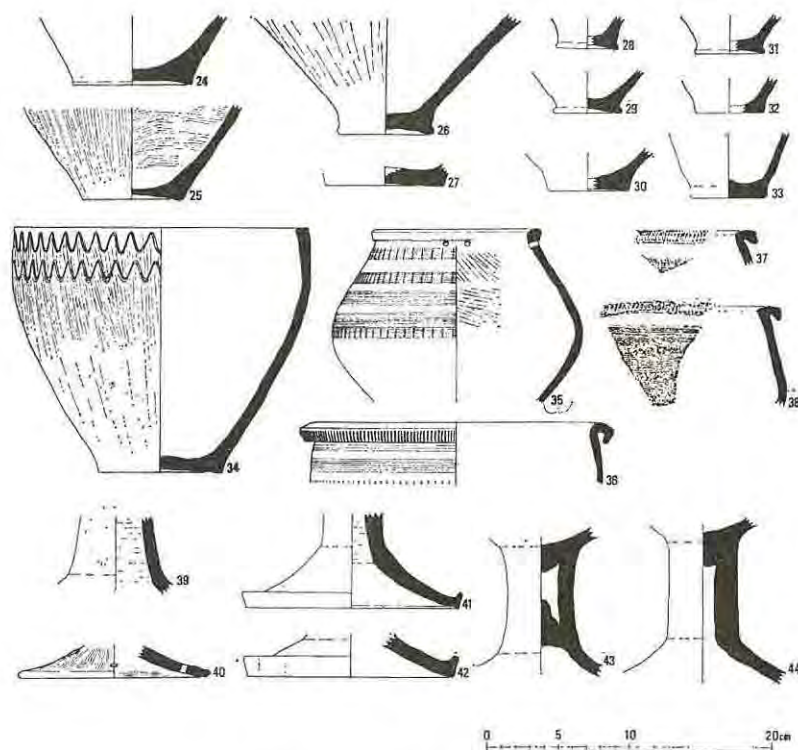
原遺跡出土の石器実測図

土したことに、ほぼ遺跡は学校を中心としたかなり広い地域に及ぶことがわかった。(8)ここから出土した土器は弥生時代の中頃のものである。

(1)はくの字状に内側にまがっている壺の口である。外側には櫛がきの直線文を縦に八本一組としてえがいている。この土器は吉野川流域の弥生土器には見られず、大和盆地か河内方面から移入したものかも知れない。

(2)は台付の鉢で脚部を失って、鉢の部分だけである。鉢には籬のような籬状文とヘラでおさえてかいた文様が一条めぐらしている。口の部分は粘土をつけてふくりましたものがあつたがとれて一部だけが残っている。これにも籬状のもようがついている。口径は約四〇㎝である。

〔石器〕 サヌカイトの石鏃で部分磨製のもものが二点(二九二頁―13・14)、打製では凹基無茎式鏃二三点、平基無茎式鏃二点、円基式鏃二点、凸基無茎式鏃五点、凸基有茎式鏃一点、その他三点で、縄文時代のものは(1・3)で他は弥生時代である。石鏃は四点で、石さじは二点(19・20)である。これは縄文時代前期か中期のものと見られる。他に石小刀が一点(21)で着柄状態を復原可能なほどの完形品で、弥生時代のものである。



原遺跡出土の弥生土器 (3)

石が一点(10)出土しており、上下左右の四面を砥ぎ面としてかなり使用されている。大きさは四・七㎝、幅六・八㎝、厚さ三・七㎝である。

遺跡は中期の遺物だけが出土し前後の時代のものではなく中期に村が成立し廃絶したと思われる。

野原遺跡 野原遺跡は吉野川の南岸にありなだらかな丘陵地を背にした河岸段丘の上にある。遺跡は昭和三十七年頃、旧野原小学校周辺に石器が多く散布しているのを小学生在が採集して来た。小学校の土手から土器片が出土したので遺跡のあることはわかってはいたが、範囲については、確定していなかった。その後智弁学園高等学校のプール建設工事中に土器片が出土し、続いて昭和四十五年頃に中村地区の農家の庭から多くの土器片が出土した。また公民館の建設工事中にも出

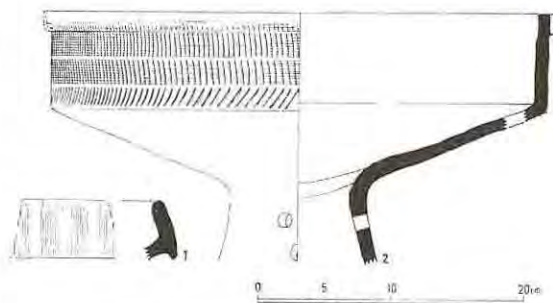
引ノ山遺跡 当市北方、金剛山中腹から南に伸びる支脈の一つに「引ノ山」がある。尾根上の古墳群発掘中、七号古墳の下層から発見された高地性弥生遺跡である。今のところ住居とそれに伴う施設が存在した可能性はなかったと考えられる。二段に掘りこまれた大きい穴がある、調理用として使うには深すぎるし、用具としての甕がみられなかったことなどから煮沸のための穴とも思えない。だがこれだけで調理用でないとも言いきれない。それは砥石とつぼが穴の中から発見されたことである。胴を穴の中に入れ口を外にしていることから、調理用としてなにかに使ったとも見られる。いずれにしても、何かの目的で丘陵上に来た弥生人が、短期間であるが、ここで生活をしたのである。弥生人は、



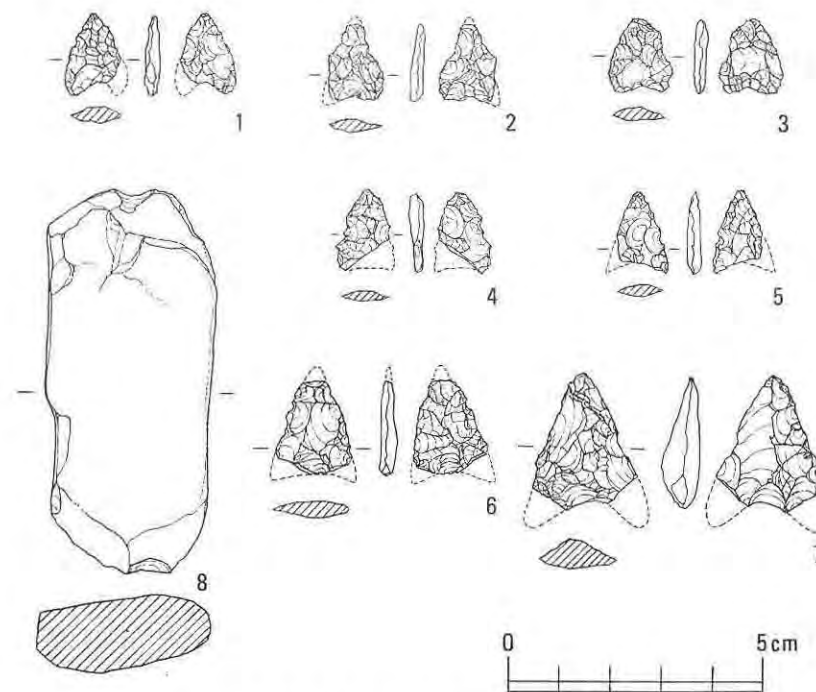
野原遺跡の遠景（南側から）



野原遺跡の遠景（北側から）



野原・中村地区出土の弥生土器実測図



野原遺跡出土の石器実測図 (1)

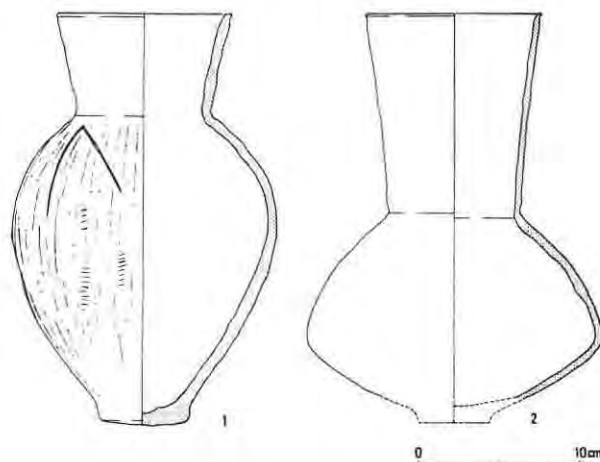
野原遺跡表採の石器計測表

	器種	分類	全長 (現存長) cm	幅 (現存幅) cm	厚さ cm	石材
1	石 鏃	凹基無茎式	1.6	(1.18)	0.3	サヌカイト
2	石 鏃	凹基無茎式	(1.51)	(1.1)	0.28	サヌカイト
3	石 鏃	凹基無茎式	1.43	1.25	0.28	サヌカイト
4	石 鏃	凹基無茎式	1.46	(1.16)	0.23	サヌカイト
5	石 鏃	凹基無茎式	1.6	(1.07)	0.25	サヌカイト
6	石 鏃	凹基無茎式	(1.78)	(1.48)	0.32	サヌカイト
7	石 鏃	凹基無茎式	(2.67)	(2.05)	0.75	サヌカイト
8	石 鏃	—	7.52	3.3	1.23	サヌカイト

することはできないが、土器の表面にはへらや櫛などによるさまざまな文様がみられる。縦横斜めの平行線文（1～16）、簾状文（3～6）、波状文（13～15）、斜格文（14～15）、同心弧文（16）や口の部分に、刻み目をほどこしたものの（4～7）、内側に二個の円形浮文をつけたものの（17）、などがある。又、土器の面にハケ目をつけたもの（18～22）もでている。これらの土器は赤褐色で焼きもよい。形はつぼがめ、鉢が大部分である。他にろうと状に広がった高坏の脚の破片がある。表面には五本の平行線を一組にして上・中・下の三段につけてある。



引ノ山遺跡の遠望（南側から）

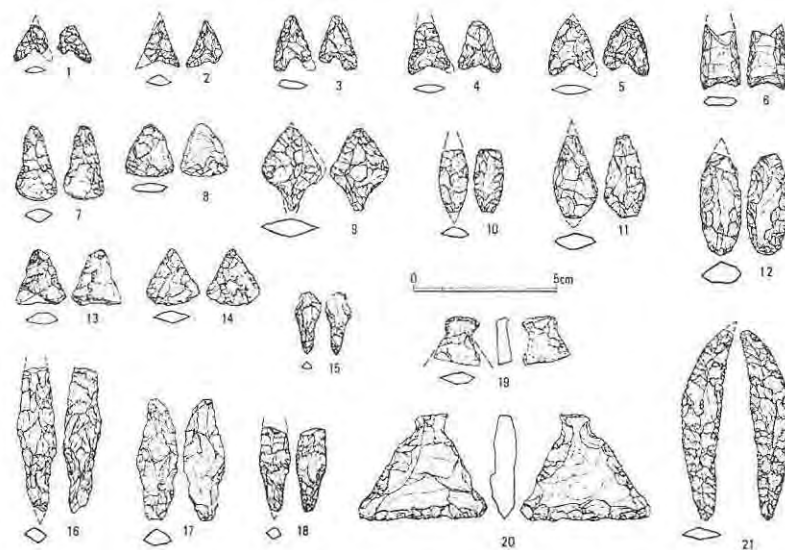


引ノ山遺跡出土の弥生土器実測図

大きさは一六・七厘、幅七・六厘、厚さ一〇厘①と全長一五・六厘、幅九厘、厚さ二・二厘②である。

中遺跡 遺跡についてはさきに述べたように、縄文から弥生にかけての遺物が出土する点では、原遺跡とよくにている。

この遺跡は弥生土器をふくむ層が地表から、わずかに二〇厘の深さにあり、ここから土器や石器が出土する。完形品がないので器形を知

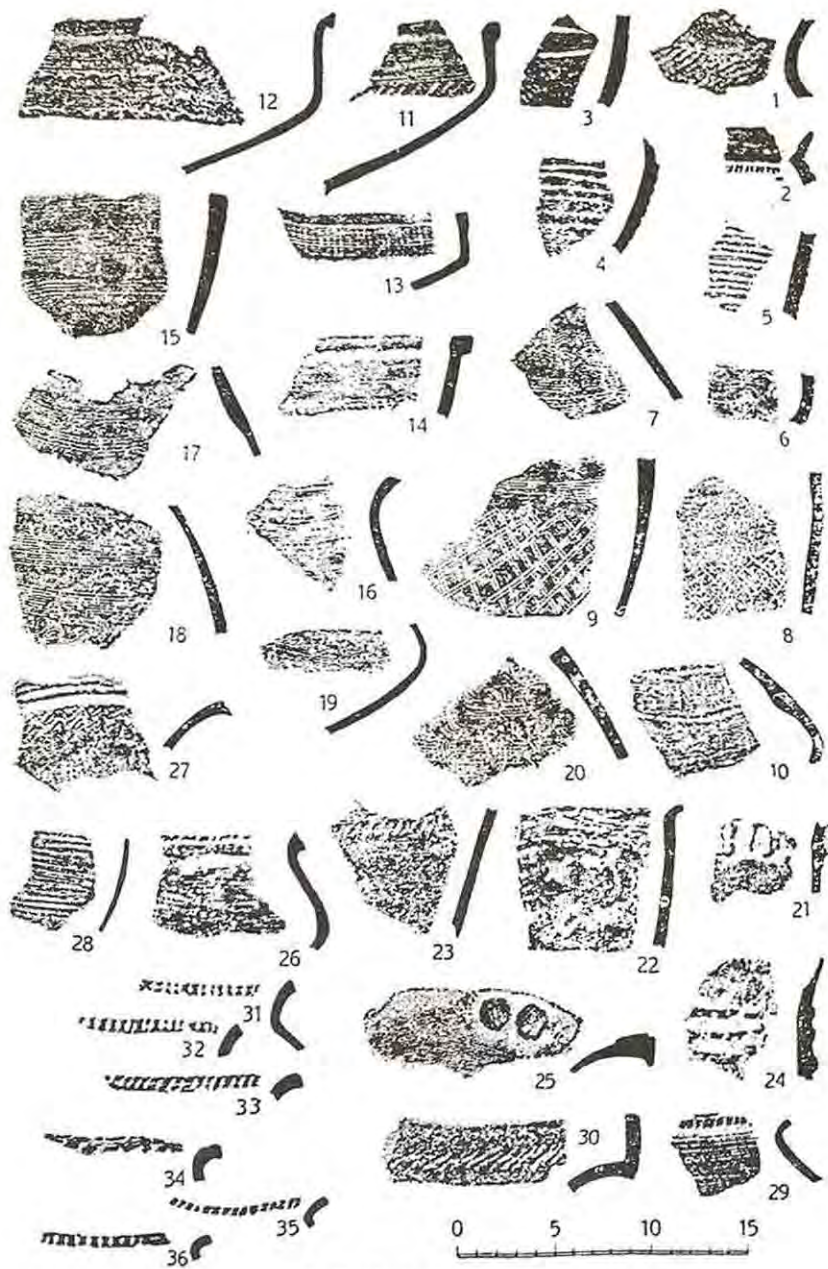


野原遺跡出土の石器実測図 (2)

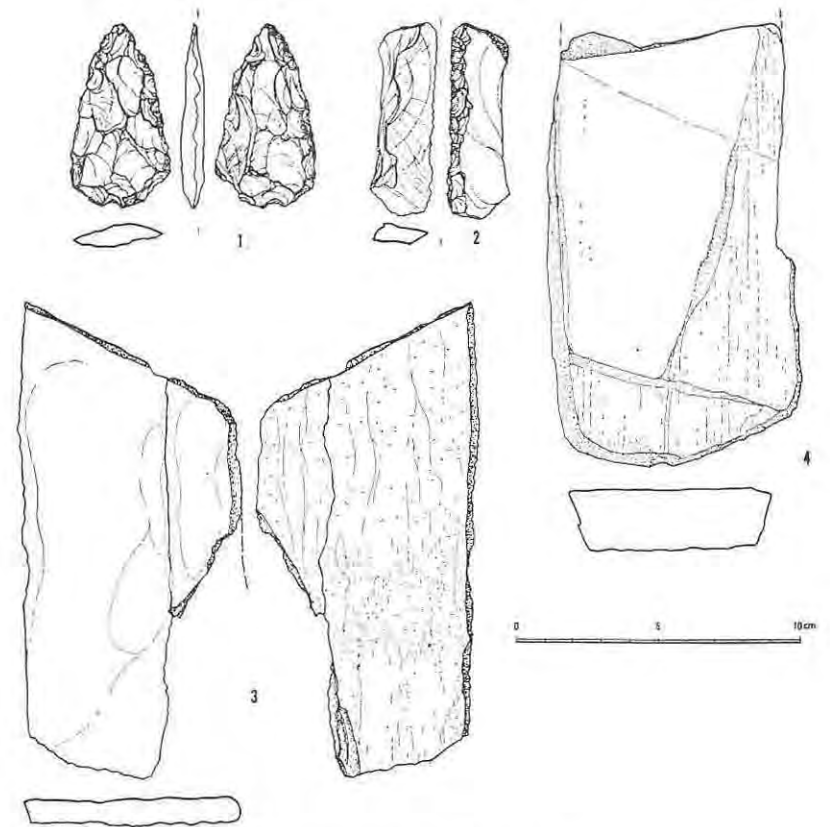
この穴を囲みながら簡単な調理をしたり、夜間の照明や暖をとるために焚火をしたとも考えられる。このように多くの用途をもった穴であるかも知れない。ほかに焼土のある穴の使用法としては、見張台としてののろしの穴とも考えられないことはない。集落が引ノ山のおもとにあると考えれば、これも必要なことであろう。この地は視野はせまいが眺望の良い位置にあることから、このようにして連絡をとり合ったかも知れない。

〔土器〕 壺型土器（1）は、ゆるやかに肩の張る長めの胴に、直線的に短く広がる口を持つ胴の張った、細長いつぼで、表面はへらでならしている。文様のない土器である。（2）は壺型土器で胴の強く張った首の長い型である。これもへらで荒くならした無文の長頸つぼである。その他につぼ型土器の底や口の部分など、数点出土している。

〔石器〕 出土量は少なく砥石二点と、打製石器数点である。砥石は（3・4）とも絹雲母片岩で、一つは両面を使用しており、かなり使ったあらし、光沢がでている。もう一つは、片面だけを使っており、特にとぎ面は美しい。しあげの砥石に使っていたと見られる。



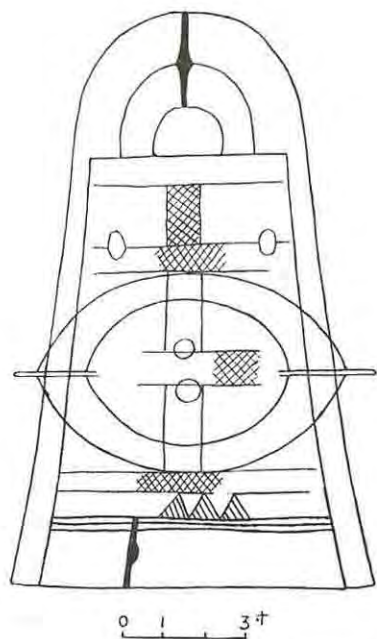
中遺跡出土の土器



引ノ山出土の石器実測図

そのほかに多くの穴をあけた
つつ型の特殊な土器も出土して
いる。

〔石器〕 ほとんど工事の際に
ほり出された土の中から採集し
たもので、サヌカイトの石鏃と
石錐である。縄文と弥生の両時
代の遺跡であるため、両時代の
石器が出土している（1～4 縄
文時代）。石鏃は凹基無茎式鏃七
点、平基式鏃一点、凸基無茎式
鏃六点、凸基有茎式鏃二点であ
る。石錐は一点だけである。こ
の遺跡は縄文後期からはじまり
弥生の前期から中期へと発展し、
中期を頂点として後期におよん
でいることが文様によって知る
ことができる。今後の調査研究
が期待される。

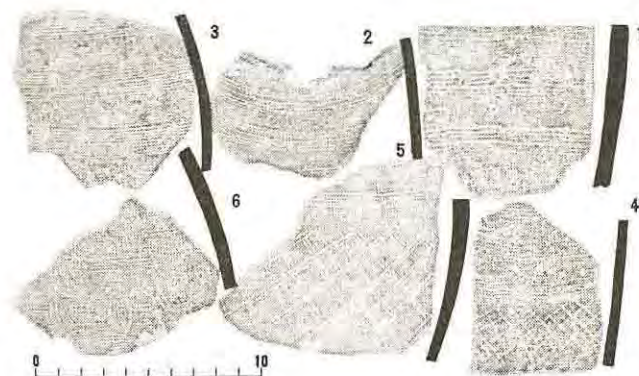


火打遺跡出土の銅鐸
(梅原末治博士『銅鐸の研究』による)

火打遺跡 中遺跡から、約一軒下流の左岸にある。標高一二〇米前後の丘陵地の中腹部にある小字、丸山の畑地から、明治二十五年頃に出土した。⁽¹⁾

銅鐸は丘陵の斜面にある畑地の地表下約九〇㎝の黒色をした砂質のニコ土の中に、つり手を東にヒレの部分を上下にして東西に斜の形に埋められていたのである。

形は定形式で、文様は袈裟襷文である。高さは三㎝、底は長い方が二・二㎝、短い方の径は一・六㎝で、両側に幅一・五㎝から一・八㎝のヒレと呼ぶ突起したものがあり、鐸身の上には、三・六㎝の半円形のつり手(鈕)がついている。表面は磨滅しているうえに、さびにおおわれているため文様ははっきりしてい



中遺跡出土の弥生土器



六倉遺跡の遠景(北側から)



六倉遺跡の遠景(西側から)

六倉と小島遺跡 島野遺跡の下流約五、六〇〇米の所に広がる平坦な台地が遺跡である。台地上には石鏃や石くずが散布しているが、どんな遺跡であるかは不明である。この遺跡の下流約一軒の小島地区にも、石鏃や石くずの散布を見る。堺筋遍照寺遺跡 寿命川東岸に沿って南へのびた低く平らな台地が遺跡である。この付近の畑地から弥生土器の細片

や、石くずが採集されるが、細片のためいかなる遺跡であるか不明である。またこの地には土師器や須恵器の残片が見られる。

滝遺跡 吉野川の左岸で東に丘陵がせまり、西に吉野川を望むやや広がつている畑地付近が遺跡と思われる。当地は後期の弥生土器や石鏃、石く

ない。身(胴)は格子目文帯で、面の左右を二列で、六区に分けた袈裟襷文がつけられている。ヒレとつり手にはのこぎりの歯のような形の鋸歯文といわれている文様がついている。つり手の内側の高い部分には綾杉文がある。銅鐸の型式は文様や特徴によって、横帯文式(最古段階鐸)、定型式(中段階鐸)、実線帯式(新段階鐸)の三種類に分けられている。横帯文式は一番小型で、高さは三〇糎にたらないものもある。定型式は四〇糎から五〇糎ぐらいを標準にしている。これらにたいして突線帯式はすこぶる大型で、高さも一三五糎にも達するものがある。

銅鐸は表面の文様が流水文を中心としたものと、袈裟襷文をつけた鐸がある。火打から出土した銅鐸は後者の袈裟襷文で、一般化した頃に作られたものである。

〔注〕

(1) 小島俊次「吉野川流域の古文化について」『奈良県綜合文化調査報告—吉野川流域—』昭和二十九年。

(2) 堤昭二発見。発掘調査は土井実、中村春寿、小島俊次の諸氏によって行われた。

(3) 注(1)と同じ。

(4) 関川尚功「原遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡概報一九七八年度』昭和五十四年。

(5) 坂口光「五條市靈安寺町、靈安寺遺跡(仮称)について」『五條古代文化第10号』昭和五十二年。今回の市史編纂にあたり、福本正夫氏の御好意で新たに資料の提供をうけた。再

実測を行ったものは二五〇頁に図示して、説明文として石器計測表を付けておく。

(6) 網干善教「宇智郡阪合部村中遺跡」『奈良県文化財調査報告第一集』昭和三十二年。

(7) 注(4)と同じ。

(8) 図(1)は堤昭二保管資料で、調査の概略は注(4)に掲載した。図(2)は、福本正夫「五條市野原遺跡の縄文土器と石器について」『五條古代文化』第七号に報告されたものである。

福本正夫氏の依頼により樫原考古学研究所にて再調査を行った。実測、製図には竹田敬和、朴美子氏の協力を得た。

(9) 堤昭二・関川尚功『引ノ山古墳群』昭和五十五年・五條市教育委員会。

(10) 注(6)と同じ。

(11) 梅原末治『銅鐸の研究』昭和二年

(追記) 福本正夫氏保管資料のうち、実測可能な石器類は、再調査を行って各々の遺跡の説明の中に追加した。実測にあたっては樫原考古学研究所、竹田敬和、朴美子、下中一代の各氏にお世話をかけ、とりまとめは泉森が行なった。

(堤 昭二)